

日本国債50周年の展望と課題 — 「二つのコクサイ化」の歴史を踏まえて—

米澤潤一

目次

- | | |
|----------------------|--|
| 1. 終戦70周年は国債発行50周年 | 5. 国債消化努力と金融自由化の牽引 |
| 2. わが国財政の現状とここに至る足取り | 6. 日本国債の展望と課題 |
| 3. プライマリー・バランスによる分析 | 補論「日本国債はほとんど国内で保有されているから心配ない」という議論について |
| 4. 財政再建努力とその挫折の背景 | |

度重なる外圧や円高といった国際要因への対応の誤りが積み積もって、いつ国債暴落が起こっても不思議でない明白な財政破綻状態を招いた。国債暴落を防ぐためにもプライマリー・バランスの2020（平成32）年度黒字化目標の達成は不可欠だが、その黒字はこの50年間でバブル期の6年間しかないほど、並大抵のことではない。達成されてもなお金利負担が深刻。財政再建のみならず経済活性化のためにも社会保障の徹底した見直しが急務。

1. 終戦70周年は国債発行50周年

本平成27年度は、終戦70周年であるとともに、国の財政面では戦後の国債発行再開50周年の節目でもある。そこで、この50年の国債の来し方を振り返り、その中から今後の展望と課題を明らかにしてみたい。

国債は国の財政赤字を埋める借金だという財政上の存在であるが、結果として信用力・流動性に優れた金融商品が市場に供給されるという金融的側面を有する。現に日本の金融自由化は国債が牽

引した。つまり国債の来し方をたどることは、とりもなおさずこれに投影されている戦後日本の財政金融、ひいては経済の歴史を描くことでもある。いつ誰が言い出したのかは諸説あるが、高度成長終焉後のわが国経済の特徴は「国際化と国債化の二つのコクサイ化」だと表現される。そこで、まずは国債化、つまり日本経済の国債依存、国債の膨張の歴史を下記略歴中の拙著「国債膨張の戦後史」に沿い、あるいはこれを補足する形でたどり、あわせてこれがグローバル化、国際化と深く関わっているということも解明する。



米澤 潤一（よねざわ じゅんいち）

昭和38年東京大学法学部卒業。同年4月、大蔵省（現財務省）入省。在英参事官、主計局主計官、理財局国債課長、同局次長、関税局長、日本銀行理事、政策研究大学院大学客員教授等を歴任後、平成16年から24年（公財）金融情報システムセンター理事長。主な著書に『国債膨張の戦後史』（金融財政事情研究会、平成25年）、『ネゴシエーション 国際会議の裏表』（金融ファクシミリ新聞社、平成7年）がある。